／編／集／余／滴

新編集委員会の発足に当たって

国立精神・神経センター国府台病院神経内科
編集委員長 湯 浅 龍 彦

私が伝統ある本編集会議に参画させて頂きましたのは，もう随分と古く10年位前になろうかと思います．当時は東京医療センターの元院長でありました東條毅先生が委員長でありましたが，その後，田中靖彦先生を挟んで3代の編集委員長に仕えたわけであります．東條委員長の時代にはそれまでとは違ってきちんとした査読の体制が確立しましたし，田中委員長の時代には国立病院・療養所の機構改革の準備とそれに伴っての「医療」のあり方をどうするのかの議論が盛んに行われました．そして鈴木委員長の時代には，特集号にシフトした企画がヒットしてそれまでの慢性的な原稿不足が解消しました．3委員長それぞれ，陰では随分とご苦労の多かったことと察せられますが，何れも名委員長の名を欲しいままにし，ともすると舵取りの難しい総合誌「医療」を無事ここまで育成・運営して来られました．

定例の編集会議は毎月第3金曜日に日比谷公園の松本楼の3階で開催され，そこでは編集委員の役得として喧騒を離れ，緑陰でのほっとする一時を過ごさせて頂いていました．そこで出合った大勢の編集委員の先生方との邂逅は，ある意味では純粋に学問的というか，雑誌「医療」のあるべき姿を求めて（それは一面国立病院・療養所がどうあるべきかという幾分書生っぽい論議でもありましたが）まっすぐな議論をさせて頂いたと思います．松本楼で過ごす時間は今から思えば純粋無垢な澄み切った時間の連なりであり，「医療」のはるか来し方50年を回顧し，また，未来を語るというまことに得難い体験をさせて頂きました．

松本楼を一歩後にし，現実に戻りますと，この雑誌の置かれている問題が重くのし掛かってきました．会員の皆が必ずしもこの雑誌に期待している訳ではない．当時はほぼ厚生省（旧）による官立という経営母体，そして常に本誌の目的は何かということが論議され悩みの多いことではありました．しかし，50有余年連綿と続いてきた「総合医学雑誌」というものは我が国においては本誌「医療」を除いては他に類を見ず，極めて独特の発展を遂げて来たものと思われます．本誌以外に今後再びこのような総合雑誌が出現する可能性はないと思われます．

平成16年国立病院・療養所の機構改革が進み，独立行政法人国立病院機構と高度専門医療センター，ハンセン病療養所に整理されて以来およそ1年が経過しました．この機構改革の余波は本紙を直撃しています．端的なこととして投稿原稿が全くといってよい程底をついてしまいました．そのような中で国立医療学会の機構改革も（新たに）宮崎理事長を迎えていよいよ新たに船出をしたところであります．その中で，雑誌「医療」の会員条項も改まり，より広域の職域に門戸が開かれることになりました．それに伴って本編集委員会にも多職種の新委員をお迎えすることとなり，編集会議はこれまでの松本楼から国立がんセンター構内の国際研究交流会館で開催される運びとなりました．新編集委員会では，新たに加わって頂いた委員の先生方からはこれまでにはなかった新しい発想で活発な意見を出して頂いていますので，大変心強いことと思っています．

一方翻って医療編集委員会から眺めた国立医療学会本体の問題についての感慨を述べますと，最大の問題は機構改革の進捗にもかかわらず会員の意識改革が未だ低調であるということがまずあげられます．「国立医療学会の会員」であるとの意識がもっと会員一人一人に自覚される必要があるし，雑誌「医療」がその機関誌であるという立場を鮮明にアピールしなければならないと考えます．そのような中で，雑誌「医療」を通して見えてくる整備すべき緊要の問題点は，1）会員の入会と退会と会費の納入についての手続きの整備．2）会員名簿の管理体制の整備です．それは，新に加わったコメディカルの会員の名簿管理や会費の徴収の体制をきちんとする必要がありますし，賛助会員制度が発足しましたので，そのような方の名簿管理と会費管理の問題も浮上して来ています．現在行われている各病院毎に取りまとめる入会，退会の方式は順次個人レベルでの登録作業に切り替えて行くべきではないでしょうか．更に大きな問題は，国立病院総合医学会と国立医療学会との関係です．どう考えても分かりづらく混乱を招くのは，この2つの機能単位が別々に運営されるという2重構造です．会員としての常識的な感覚から言えば，国立医療学会に会費を収めて会員になるからには，一方で雑誌「医療」から情報を得たり，それに投稿したりする活動と，年一回の総会，っ